目次

第１１回学術大会要項、参加申込み案内・・・・・１
大会プログラム・・・・・・・・・３
大会委員長挨拶：第 11 回学術大会の開催にあたって・・・・５
シンポジウム１「身体技法の研究法、分かってきた効果とトランスパーソナルな可能性」・・・・７
シンポジウム２「クンダリニー：経典・思想、ヨーガ修行体験と覚醒、暗闇と夜明け」・・・１０
個人研究発表１－２（２７日）・・・・・１４
個人研究発表３－４（２８日）・・・・・２１
和室ワークショップ紹介・・・・・２７
アクセス・会場案内・地図・・・・・・３０

第 11 回学術大会

会期：2010 月 11 月 27 日（土）～28 日（日）

会場：常葉学園短期大学　7 号館 3 階 731 号教室、2 号館 1 階和室

（最寄駅：ＪＲ東海道新幹線・ＪＲ東海道線静岡駅）会場地図は３０ページに掲載。

大会テーマ：**「トランスパーソナルな体験のもつ力」について**

□参加申込方法

E-mail による参加申込先：jatp-shizuoka@nexyzbb.ne.jp（担当：巻口、田中ほか）FAX による申込先：055-966-9003（大会事務局直通）郵送による申込先：〒420-0911 静岡市葵区瀬名 2-2-1　常葉学園短期大学（とこはがくえん）教養教育准教授　巻口勇一郎宛　（「学術大会参加申込」と朱書してください）大会参加申込みの際、以下の申し込み必要項目をメールにコピーして、必要事項をご記入の上（該当しないものは削除）、お申込みください。また、事務処理の都合上、メールタイトルを「JATP 第 11 回学術大会申込」としてくださいますよう、お願いいたします。（FAX・郵送の場合も同様です）

JATP 第 11 回学術大会申込み要領
フリガナ
氏名：
所属：
郵便番号と連絡先住所：

連絡先電話と FAX 番号：メールアドレス：
会員種別：　学術会員・一般会員・学生会員・非会員・非会員学生（当日学生証が必要です）
懇親会：　出席　・　欠席
土曜日ランチ弁当・デザートつき（1000 円）：　要　・　不要
参加種別：　学術大会２日通し・1 日のみ

●参加費支払いについて
参加費　予約（事前登録）は 11 月２０日までとさせて頂きます。参加費・懇親会費・土曜日ランチ弁当代は一括し下記の口座にお振込みください。大会 3 日前（11 月 24 日）までにお振込みを完了してください。期日までのお振込みが確認できない場合は申し訳ありませんが予約キャンセル扱いとさせて頂きますのでご承知おきください。

参加費振込み先口座：
ジャパンネット銀行　　すずめ支店（店番 002）　普通 1805743
トランスパーソナル静岡大会事務局　巻口勇一郎
（トランスパーソナルシズオカタイカイジムキョク　マキグチユウイチロウ）
参加費のお振込みをもって申し込み完了とさせていただきます。

学術大会2日通し（1 日参加の場合）

会員種別	学術一般会員	非会員	学生会員	学生
予約	5000（3000）円	6000(4500)円	3000(1500)円	4000(2000)円
当日	6000(4000)円	7000(5500)円	5000(2000)円	4500(2500)円

懇親会（27日夜）

会員種別	学術一般会員	非会員	学生会員	学生
予約	4000 円	4000 円	3000 円	3500 円
当日	5000 円	5000 円	4000 円	4500 円

抄録集・・1 冊 1500 円（当日販売）。
土曜昼のみランチ弁当を 1000 円でご用意します（クルミ酵母パン・お茶付き、要予約・一括振込みのみ）。

●発表者はレジュメをご自身で 100 部ご用意ください。パワーポイント（windows のみ）は USB メモリーでお持ちください。委細は大会ホームページをご覧ください。
http://shizuokatranspersonal.blogspot.com/

大会プログラム

11 月 27 日（土曜日）

8:45～9:10 受付（受け付けデスクは 2 号館1F和室前になります）

731 号教室

9:10～9:20 開会挨拶
発表1 司会 合田秀行（日本大学）
9:20～9:55「仏教の社会貢献と ex-spiritualism － 龍爪信仰復興を目指す事例から」
戸田弘子 （大阪大学大学院文学研究科博士後期課程）
10:00～10:30「不妊女性の「喪失」という経験世界を知る――V.E.Frankl の「意味」という視点から」
竹重 幸（名古屋大学大学院）
10:35～11:05「ケン・ウィルバーと西田幾多郎におけるヘーゲル哲学と大乗仏教の受容について」
青木久美 （沖縄工業高等専門学校）

11:10～12:20 シンポジウム 1 「身体技法（禅、瞑想等）の研究法、わかってきた効果とトランスパーソナル（普段の自分を超える）な可能性について」司会：巻口勇一郎（常葉学園短期大学）
講演1「瞑想法は“健康の科学・実践”にパラダイムシフトをもたらすか？」
坂入洋右 （筑波大学）

12:30～13:30 昼食（要予約のランチ弁当は 12 時 15 分より受付にてお渡しします。）

13:25～13:30 午後の部開会ミニコンサート（常葉学園短期大学音楽科有志 MCM による）
13:30～16:10 シンポジウム 1（午前からの続き）
講演 2「瞑想研究におけるトランスパーソナル心理学の果たした役割と「一人称アプローチ」の可能性」
村川治彦（関西大学）
講演 3 「トランスパーソナルからの展開～禅に学ぶ「多文化共生のための価値」の構築」
竹中智泰（常葉学園大学） 講演 3 の後に休憩（5 分）をはさみディスカッション

発表 2 安藤治（国立クリニック）
16:20～16:50「大学生の首尾一貫感覚（SOC）と死生観の関連性について」
遠藤伸太郎（立教大学大学院）・大石和男（立教大学）
16:55～17:25「日本語版自己報告式スピリチュアル・インテリジェンス尺度（SISRI-J）作成の試み」
村上祐介（関西大学大学院心理学研究科）
17:30～18:00「明晰夢体験 ～その内容分類と「第四の意識状態」の可能性～」
石田沙織（明治大学大学院 情報コミュニケーション研究科博士後期課程）
18:10 懇親会場「福一丸」054-274-2911 へ貸切バスで移動（参加者は短大正門前に集合）
18:30～20:30 懇親会 （終了後 JR 静岡駅まで送迎）
司会：高阪真希（NHK 静岡放送局キャスター）、

11 月 28 日(日曜日)

8:45～9:10 受付(受け付けは 2 号館1F和室前)

731 号教室

発表 3 石川勇一(相模女子大学)

9:15～9:45「トランスパーソナルな世界との接触がもたらす生と死の受容――宮迫千鶴のスピリチュアリティをめぐる旅から―」

岩崎美香(明治大学大学院 情報コミュニケーション研究科 博士後期課程)

9:50～10:20「5歳にして自我体験から化身教義に至った「事例エミリー」の現象学的解明」

渡辺恒夫 (東邦大学)

10:25～10:55「臨死体験の諸相」

塚崎直樹(つかさき医院)

10:55～13:00「昼食・理事会・総会」学食はお休みです。付近の食堂をご利用ください。

理事会は 7 号館 1 階ゲストルーム(学食内)になります。

13:15～15:45 シンポジウム 2

「クンダリニー:経典・思想、ヨーガ修行体験と覚醒、暗闇と夜明け」

合田秀行(日本大学)

成瀬雅春(成瀬ヨーガグループ主宰)

巻口勇一郎(常葉学園短期大学:モデレーター)

休憩後ディスカッション(休憩中に会場より質問用紙を回収します)

発表 4 蛭川立(明治大学)

15:55～16:25「妊娠・出産期におけるスピリチュアルペアレンティングおよびスピリチュアルケアの重要性～退行療法のメタ分析を通して～」

風間明日香 (京都大学大学院 人間・環境学研究科 博士後期課程)

16:30～17:00「トランスパーソナル研究所大学院(Institute of Transpersonal Psychology: ITP) における教育:日本発の思想の影響など、いままで語られなかった側面について」

田尻宇成(projet transpersonal 主宰、トランスパーソナル心理学研究所博士課程修了)

17:05～17:35 「東洋の身体技法における心身関係の一例:気功体験の現象学的記述から」

村川治彦(関西大学)

17:40～17:50 閉会の辞

2 号館 1 階「和室」(ワークショップ)

11 月 27 日(土曜日)

12:00～15:00 長野式鍼灸:竹内馬喜男(鍼灸院・喜らく院長)

11 月 28 日(日曜日)

11:00～14:00 元極気功 米強(常葉学園短期大学、日本大学講師)・・参加随時

第 11 回学術大会：「トランスパーソナルな体験のもつ力」の開催にあたって

巻口勇一郎

鍼灸、アーユルヴェーダ、ヨーガ、瞑想、禅、祈り、自然体験など身体技法の範疇に含まれるものは多様である。それら（の一部）を教育に生かそうとするホリスティック教育、それらにハーブやホメオパシー等を加え医療に生かそうとする補完代替医療や統合医療、こうした心身相関の技法が今後普及するためにはエビデンスが求められるが、体験内容の一致によっても客観性を論ずることは可能だろう。第１日目に、瞑想などの身体技法の研究法、その研究の成果としてわかってきた身体技法の効果とトランスパーソナルな可能性について検討する。２日目にはこの検討を踏まえ万人の潜在能力であるクンダリニーの目覚めについて検討する。本学会でははじめてヨーガ等を通じ到達するクンダリニーとよばれる主観をテーマとするが、この実証的研究はあまりない。妖精やサンタなどのファンタジーは無視できぬ影響力をもつ、言語的に共有可能な主観である。一方、クンダリニーについては言語的に力説してみたところで共有不可能ではないのか、またそもそも科学的に測定可能なのか。限界を認識しつつも、本大会では思い切ってクンダリニーの思想的位置づけ、ヨーガ修行を通じてみたクンダリニー、目覚めにおける暗闇と夜明けについて検討したい。クンダリニーの発表については毎回のことであるが、私としては断片的な実証的裏付け、経験者の証言による裏付けと古典文献の裏付けのある哲学、思想的な体系・仮説の提示を、経験者を除いては理解されないことを承知の上で行うことになる。

クンダリニー覚醒というと心身両面で厳しい修行を積んでも到達できるかどうか分からない特別な体験だと思われるかもしれないが、これはある程度の準備が整えば（これを未熟とも表現できる）誰にでも自然に起こりうる体験であり、今日欧米でもごく一般の人がこの体験をもっており、その数もかなりにのぼっているという見解がある。その人にとって予定された覚醒の時期というものが想定でき、その時期にあっては特に激しい霊的修行や臨死体験を伴うようなアクシデントがなくても、ふとした瞬間に、社会奉仕活動や真摯な経典研究等を契機として目覚めることがあるともされ、経過も一様ではない。こうしたスピリチュアルイマージェンスの体験をもつ人が昨今増えているとすれば（社会調査しなければならないが）これはどういうことだろうか。

近年、社会学においては、持続可能な社会（sustainable society）についての研究が盛んだが、これはドメスティックバイオレンス（伴侶や友人に対する暴力的言動）など社会病理の増大にとどまらず、現代文明の存続（や成長）自体が揺らいでいるからである。慣れ親しんだ快適な物理的生活の安定が揺らいでいることが、新たな意識への集団的な移行や覚醒を促しているのではないか。しかし、現実逃避では困るわけで、目覚めた新たな心的なエネルギー・その全身全霊の感覚が、従来の現実生活を（維持し助長するのではなく）修正する「力」をもつものであってほしい。デュルケムの言う現代人のアノミー（欲望肥大化）やエゴイズム（自己目的化）に誰が歯止めをかけるのか？これこそ学問分野を超えた現代の最重要課題であり論点ではないだろうか。政治学や法社会学を含む社会科学では力(Power)とは、相手を最終的には意に反してまでも動かす資源と理解される。「力」などという現実的で荒っぽいテーマは、トランスパーソナルとは程遠いものだと思われるかもしれない。しかし、力や現実と無縁なトランスパーソナルは、厭世的な逃避に傾くことを意味するのではないだろうか。そこで、本大会では、「トランスパーソナルな体験のもつ力」、公共性や実在性についてテーマとした。2010 年 2 月にカリフォルニアでトランスパーソナル学会大会が開催された。200 名を越える参加者が集い、Spirituality in Action をテーマに、3 日間にわたって議論がされた。現代という時代に対する危機認識を前提に、日々の決定や行動に影

響を及ぼすスピリチュアリティに焦点を絞った理論的、実証的研究発表を聞いた。研究法の高度化と理論の精緻化が進んでいる印象を受けたが、会員数の伸び悩みや投稿論文数の停滞という現実も聞こえてきた。研究の高度化と文字による伝達だけではなく、直接的経験の広まりがなければ、やはりトランスパーソナルに関心をもち研究を進めようと意欲する人は今後も増えない（一般心理学がトランスパーソナルを吸収したのか調査する必要がある）。そして、たとえその体験が個人にとって明瞭で法悦であっても、内容的公共性、強度と持続性、不随意性がないとすれば、ぐるぐると内閉的に自律運動を続ける現代の日常を規範的に問い直すにあたっては無力ではないだろうか。本大会では、多様なタイプの経験に関する研究を報告していただくことによって、自明視してきたシステム的な現代の価値・規範（自我）を貫き、脱中心化･相対化する力をもつ体験について考えたい。個人の日常的な目的のために手段化できる随意的なエネルギー･スピリチュアリティではなく、こちら側の意思に反してまで生じてくるような不随意的で持続的なスピリチュアリティが、スピリチュアル・イマージェンシー（緊急事態）の特徴である。自分の意図に沿わないエネルギー的な変動や介入は症候群とラベリングされるが、無価値な現象であろうか。昨今、実社会や社会学においてはオンブズマンや外部監査など、外部からの言語的介入によって、それまで絶対であった内部論理が修正・相対化されうると言われるようになった。前提として、残念ながら内部からの真の改革や自己規制が困難であるということがあり、外の空気、外部からの流入があってぐるぐると堂々巡りをする循環が改められる。自我に関しても、ある程度はこうしたプロセスが想定できるのではないか。ニクラス・ルーマンは、組織改革に見られるような言語を通じた外部の介入は刺激因に過ぎず、最後までどのような変化が起きるのかはブラックボックスであり、分化した組織の決定にゆだねられているとする。言語的介入は専門家主導で作成されたものの一方的押しつけであり、同直圧力と反発とを必然的に生み出すのであって、事実としては更なる分化（分裂）が進むだけだと考える。こうした共同性が失われた状況において、ルーマンは、身体に着目し、直接体験によって共通の地平に到達する可能性が残されていると考えている。

クンダリニー覚醒に関して、意図的に身体技法を通じ心身が浄化できていればベストだが、現代人のほとんどがそうした準備から遠ざかっている。こうした現代的状況において、準備の不十分な目覚めが構造的に生ずる。過労死と隣り合わせに睡眠を削って働くビジネスマン、もっと広く市場が縮小するなかで生存をかけて生活する現代人は、不安定=死という変化をどこかで意識せざるを得ない修行的状況にあるとも言える。臨死体験者が最もクンダリニー覚醒を得ている可能性が米国における量的調査により明らかになってきている。辛いライフイベントはクンダリニーの目覚めを促す。クンダリニーについては私秘的なもの、本人の上げたい下げたいという意図に従属する随意的なものとして理解されることが多いが、他方でクンダリニーは当初は本人の意に反し力強く持続的に動くとも思われる。この段階では、クンダリニーは本人（区画された自我や身体）にとって異物と認識されやすく、これを排除しようと反射的に抵抗反応が起こる。この確執・アレルギー的反応がクンダリニー症候群の状態であると考えられる。しかし体験が深まれば諦めて委ねる感覚や魅了される気持ちが育まれ、これまで異物にすぎなかった未分化の公共領域＝柱のほうも自分であると思えてくる。自我とクンダリニーの重層化＝共存を許すことが症候群の夜明けにつながるのではないか。また、クンダリニーの連鎖的覚醒の可能性を示唆する意見も存在する。意識の彼方にあった朦朧とした脆弱なものが硬くなり力をもってくることで、時代的･社会的な方向転換は可能なのか。今大会では、クンダリニー症候群の原因や効果的対処法に限らず、その不随意性や力について考察することで、「トランスパーソナル」＝超越の意味を改めて問い直したい。

ご案内・・・参加者の皆様には大会前後に白隠ゆかりの地を散策していただき、富士山周辺で自然や持続可能なスローライフを実感していただくこともできるのではないかと思います。学内和室では気功などのワークショップを企画しています。夜の懇親会では駿河湾の海の幸を堪能していただけるよう企画しています。良い出会いと充実した時間をもっていただければ幸いです。

27 日午後「身体技法の研究法、分かってきた効果とトランスパーソナルな可能性」について

瞑想法は“健康の科学・実践”にパラダイムシフトをもたらすか？

坂入洋右（筑波大学）

自然科学的研究の単純な方法論と人間による複雑な実践活動の根本的な乖離のために、研究者と実践家の間に深い溝が存在し、互いに「役に立たない研究ごっこ」や「積み重ならない独りよがりな実践」などという批判に甘んじるような非生産的な状況が続いてきた。しかし、多くの領域で古いシステムの限界が露呈して暗闇の中で手探りをしている現在が、パラダイム転換の夜明け前であることを、そして、瞑想法の実践・研究の進む先に出口（光）が見えることを期待している。

1960 年代に西洋科学への疑問から東洋ブームが起き、多くの若者が瞑想法を体験し、多くの科学者が瞑想法の研究をした。しかし、実践家は社会から研究者は事実から距離を置き、結果的に両者とも現実から離れてしまった。たとえば科学者による瞑想法の研究では、特別な覚醒低代謝状態（Wallace,1970）をもたらすリラクセーション法として瞑想法に注目を集め、その後、居眠り状態と変わらないという“エビデンス”（Holmes,1984）によって否定された。その後一旦衰退し、2000 年くらいから再度瞑想法が注目されて現在に至るが、今回のキーワードは、マインドフルネス（mindfulness）であり、セルフモニタリング法としての瞑想法が注目されている（Teasdale 他，2000）。同じ失敗を繰り返さないために、実践と研究の統合（までは無理でも両立）に向けての努力が不可欠であり、そのために今回の発表では、実践に役立つ科学的研究方法のあり方（パラダイム）を提案したい。

研究の実践的有効性を確保するためには「メカニズムよりアウトカムを重視すること」が、科学的実証性を確保するためには、「個人差の要因と多変量の要因をどのように研究方法に組み込むか」が重要な課題となる。「包括的媒介変数」という概念を導入することによって、これが可能になるとする考え方を紹介する。簡単に説明すると、包括的媒介変数とは「人間一人ひとりの心身を測定器具とし、心身に生じる包括的反応を指標とした変数で、アウトカムの予測が可能なもの」である。心理的反応、生理的反応、身体的動きのパターンなどが包括的媒介変数の有力な候補になると考えられ、二次元気分尺度：TDMS（坂入，2009）、脈波のカオス分析（今西・雄山，2008）、動きのパターン抽出：CHLAC（岩田他，2007）などを、測定指標として活用することができる。

近年，医療や健康の領域において、CAM（相補代替医療）と EBM（根拠に基づく医療）が盛んになっているが、現状のままだと、CAM の代表的な方法として瞑想法が注目され、不適切な EBM の研究で得られた“エビデンス”によって瞑想法が否定される結果になることが危惧される。CAM や EBM などの動向の基盤となっている問題の本質（現実）は医療費の削減であるが、現在の医学や科学に基づく医療費の削減は原理的に不可能であり、瞑想法を含む東洋的行法の実践システムの中に、これを可能にして人類の健康と幸福（well-being）を促進するひとつの答えがあると考えているので、これについても解説する。

瞑想研究におけるトランスパーソナル心理学の果たした役割と「一人称アプローチ」の可能性

村川治彦　（関西大学）

1985 年 4 月国立京都国際会議場において開催された第 9 回トランスパーソナル国際会議は、日本でトランスパーソナル運動が紹介されるうえで大きな役割を果たした。吉福伸逸＋河合隼雄編の「宇宙意識への接近」（春秋社）にこの会議のいくつかの講演が収録されているが、その中に故フランシスコ・ヴァレラが行った「知覚と人工知能」というテーマの講演がある。ヴァレラはこの講演で認識における自己言及の問題を扱いながら、西洋近代科学の基礎構築主義を批判し、最後に西谷啓治を引用して「超越（transcendence）ではなく、「超降下（trans-descent）」による発見・・・・。ただここに在るという次元にまで降下すること。それこそ、外にであれ内にであれ、参照先への執着を捨て去る唯一の方法だろう。それは、ありのままに在ることを信頼することである。瞑想の伝統は科学を包み込むことのできる器であり、そこでは叡智と知識が壁をつくり合うのではなく、互いに浸透しあうことも可能だ」と述べている。

ご存知のようにヴァレラは 1970 年代 H. マトゥラナと共にオートポイエシスという概念を提出し、第三世代システム理論に大きな影響を与えたが、同時にチベット仏教のトゥルンパのもとで仏教瞑想に励み、ウィルバーと共にシャンバラ出版社の編集顧問も務めていた。そのヴァレラがこの講演で示した「ありのままの存在への超降下」という方向性は、認知科学における身体性を重視する enactivism から神経現象学、一人称のアプローチの提言へという彼のその後の研究活動の道筋を示していただけでなく、意識研究の分野でトランスパーソナル心理学が進むべき道を考えるうえで極めて示唆的なものであった。

瞑想を基盤とした意識研究におけるトランスパーソナル心理学が果たした役割については、安藤治先生の「瞑想の精神医学―トランスパーソナル精神医学序説」に詳述されている。この発表では、同書でまとめられた 1990 年代半ばまでの研究を踏まえ、その後の意識研究の動向について、特にヴァレラが示したような現象学的アプローチと神経科学との協力の問題について整理しながら、あらためて 21 世紀のトランスパーソナル心理学が進むべき方向性について考えてみたいと思う。

トランスパーソナルからの展開～禅に学ぶ「多文化共生のための価値」の構築～

竹中　智泰（常葉学園大学）

国内外を問わず、現代社会が抱える重要課題の一つに異文化の接触によって起こる諸問題の解決がある。恐るべき早さで進歩する通信メディアは、近隣の情報から地球の裏側の出来事まで、ヴィジュアルな映像で私たちに「事実」として明らかに知らしめる。その結果、私たちは、今まで知らなかった、ある意味では知る必要のなかった事柄まで否応なしに知ってしまうことになる。今まで長い間、当然のこと、正しいこととして受け入れてきた考えや習慣が、実は不当で、悪しきものだと示されたとき、私たちはそれを素直に受け容れることができるであろうか。かりに受け容れるとしても、鵜呑みにはできない。（中略）それは、暴流のごとく、“one of them”であるはずの一つの価値観のもとに全世界を呑み込もうとしているかのようである。この動きがいわゆる“グローバリゼーション”であると言っても過言ではない。そのような状況の中で私たち研究者の責務はその暴流に呑み込まれることなく、できるだけニュートラルな立場から、客観的にその是非を検証することである。私たちの共同研究の趣旨はそのような意図のもとに多文化共生の可能性を探ることにあった。

不調和のことを「木に竹を接ぐ」などと言う。自明のことながら、松に竹は接げない。松と竹を一つにしようと、接着剤で接合しようとするのは愚かな行為である。松は松として、竹は竹としてその存在価値をもって機能し、生きている。それぞれの別個の存在価値を認めるとき、松は松として、竹は竹として「共に存在しうる」のではないか。物であれ、人であれ、文化であれ、個別の存在がもつ価値を真摯に認めることを共通の立場（地平）として確立することが問題解決の糸口であり、それはそのまま結果につながる。しかしその地平に立つにはそれなりの努力と見識が求められる。

ここ数年多文化共生を可能にするために求められる“根源的価値（原理のようなもの）”について考えてきた。上記の文章は本務校での共同研究報告書＊の前文（「松に竹は接げない～異文化と出会うとき～」）の一部である。私は、「個別の存在がもつ価値を真摯に認めることを共通の立場（地平）として確立すること」を禅の立場から試みた。そこには、ある意味でトランスパーソナル的地平が与えられているが、禅はそこにとどまらず、そこから一歩進んで「一、万法に帰す」立場や「賓主互換」の立場にすすむ。そこに至って初めて、共通の地平で「松は松として」「竹は竹として」その価値が十全に認められる。

ここでは以下のよく知られた禅の三つのエピソードから上記の問題を考察したいと思う。

(1)潙山霊祐と香厳智閑：「香厳撃竹」

(2)六祖慧能と南嶽懐譲：「説似一物即不中」

(3)仰山慧寂と三聖慧然：「仰山問三聖」

＊竹中「「異」「多」再考　多文化共生の成り立つ場を求めて～東洋的美意識からのアプローチ～」

（常葉学園大学共同研究「多文化共生的視点による美意識の研究」2008 年 3 月、所収）参照

28 日午後「クンダリニー：経典・思想、ヨーガ修行体験と覚醒、暗闇（症候群）と夜明けについて」

クンダリニー（クンダリー）体験に関する諸相

合田秀行（日本大学准教授）

１　インド哲学史から見たクンダリニー

インドにおいては、古代思想から「普遍的なもの」「絶対的なもの」との合一の道を究極的な境地としてきた。より正確に表現すれば、「普遍的なもの」「絶対的なもの」と個我の根源は同一であるという思想を前提としている。そして、その境地を目指すべく苦行や瞑想などを取り入れた修行論が形成されてきたのである。そのような過程にあって、インド思想はヒンドゥー教のみならず仏教もタントラ（密教）的色彩を帯びてくる時期が訪れ、肉体の修練に重点を置くハタ・ヨーガの技法が確立した。８世紀以降にナータ（ナート）派というヒンドゥー教の一派が興り、秘密ヨーガを修行する者たちのことをナータと呼ぶが、そのうちの一人、ゴーラクシャナータ（あるいはゴーラクナート、11～12 世紀頃）は、ハタ・ヨーガを大成した開祖とされる。ハタ・ヨーガの「ハタ」は力を意味する（異説あり）が、強い意志と肉体的修練によって心を統御することを目指す。ゴーラクシャナータの著作としては『ゴーラクシャ・シャタカ』が伝わっている。その後、16 世紀頃にスヴァートマーラーマが『ハタ・ヨーガ・プラディーピカー』（ハタ・ヨーガの灯明）を著して、この行法を体系化したとされる。

『ハタ・ヨーガ・プラディーピカー』は全四章から構成されている。第一章は体位法（アーサナ）の解説で、坐法にとどまらず、複雑な体位をも含んでいる。第二章は身体の浄化法と調気法の解説であり、プラーナが流れる管について示される。中国の漢方医学でいう経絡に似ており、経験知によってその存在が認められる。そして、その管の中でも重要なのは会陰部から頭頂まで脊椎の中央を貫いているスシュムナー管であり、その脇にイダーとピンガラーという二つの管が螺旋状に位置している。管に汚れがつまっていると三昧の境地に入れず、解脱が得られないので、この汚れを浄化する必要がある。第三章はムドラーの解説であり、これは体位法と調気法を組み合わせ、さらに筋肉を引き締めるなどの複雑な行法である。

これらの目的は、脊椎の基底部に蛇のようにとぐろをまいて眠っている生命エネルギーであるクンダリニー（kuṇḍalinī, クンダリーとも呼ぶ）に刺激を与え、目覚めさせることにある。そして、クンダリニーがスシュムナー管を上昇して、尾てい骨、生殖器、臍、心臓、喉、眉間に存在する六つのチャクラを次々に覚醒させていくと伝えられている。ヨーガ行者はそれらのチャクラを順次観想することにより、心を清浄にしていき、最後に頭上にあるサハスラーラに達すると、光に包まれて解脱に達する。最終章は三昧の解説であり、三昧は塩が水に融けて一体となることに喩えられ、ジーヴァートマン（個我）とパラマートマン（最高我）との合一であると説明される。

ハタ・ヨーガが、パタンジャリの作とされる『ヨーガ・スートラ』における古典ヨーガと相違する点は、身体の浄化法を究極まで深化させたこと、体位法と調気法の種類を増加させたこと、それらを基礎とするムドラーと呼ばれる高度の修行法を構築したこと、さらに心身の修練から生ずるさまざまな超能力の獲得を積極的に求めたことが指摘されている。さらに、重大な相違点は、古典ヨーガが心身の沈静化を目指したのに対し、ハタ・ヨーガはその活性化を最大の目標に置いたことである。また、古典ヨーガは超能力を解脱にとって障害であると考えたのに対し、ハタ・ヨーガはそ

の獲得を重要な目標と見なしていた。

２　現代における「クンダリニー」の諸相

私事ながら、初めてクンダリニーを含むチャクラなどのインドにおけるタントラ的身体観に接したのは、高校生時代に読んだ本山博先生（IARA 会長）や桐山靖雄師（阿含宗管長）らの著作においてであった。その頃から、東洋思想全般にも関心があったが、とりわけ修行論や身体技法に惹かれるものがあり、その考察は現在にまで継続しているし、自分なりに実践を試みてきたものも少なくない。その後、大学に進んでからは、恩師である玉城康四郎先生とサンスクリット文献の講読の演習において、仏典以外では、長い時間を費やして、『ヨーガ・スートラ』をはじめとするヨーガ思想の関連文献を読み続けていた経験があり、それと平行しつつ、実践的かつ古典テキストも踏まえて解説された、今回のシンポジストでもある成瀬雅春師の著作、さらに文献研究の立場から、佐保田鶴治先生のヨーガ研究、湯浅泰雄先生の東洋的身体論に関する著作からも影響を受けてきた。また、個人的には東西の神秘思想の比較研究をテーマとして掲げてきたが、インド思想圏以外では、一部の例外はあるものの、クンダリニーあるいはクンダリニーに類似する記述を見出すことができない点は、私の問題意識として常に去来してきた。もとより、私の対象としてきた範囲においてということであり、まだ気付いていないだけかもしれない。

このような著作との出会いや文献研究という側面から見てきたクンダリニーだけでなく、私の周囲でも、かなり以前から、いわゆるクンダリニー症候群と思われる体験者がいたことも事実であり、近年、一層増加傾向にある印象は否めず、その対処法を巡っては看過できない状況になっている。そのような背景が、今回のシンポジウムに至ったと言えるたろう。

３　今後のアプローチを模索して

いわゆるクンダリニー症候群に対する対応策は、決して容易な問題ではない。古来、このような身体技法には、直接指導にあたるグルを不可欠とするのが伝統であり、秘儀や口伝を重視するという側面も、この問題に取り組む上での壁となっている。トランスパーソナル心理学・精神医学で取り上げられるスピリチュアル・エマージェンシーのような状況における対応も、インドでは本来的にこのようなグルが担っていた。即効的な対応策とは言えないだろうが、「温故知新」の故事通りに、古典研究を踏まえて、現代的な多角的視点も考慮しながら、対応策の道筋を模索していく道も否定できないと思われる。また、そのようなクンダリニーの存在、さらに症候群と呼ばれる問題に関して、地道な啓蒙活動を推し進めていくことは、トランスパーソナル心理学・精神医学という分野に課せられた役割である。

他方、現代におけるクンダリニーがもたらす問題の困難性は、上述のハタ・ヨーガという身体技法とそれに基づく覚醒を求めている人々に限定されず、一見して、そのような世界とは無縁な人々の間にも、このような体験が拡散していることである。それが、果たして偶発的な事故などによる刺激に起因するものなのか。現代の科学によって、どれだけクンダリニーの実相が解明されるかは、未知数ではあるものの、国内外の機関でも科学的・生理学的な解明の試みも積み重ねられている。クンダリニー覚醒の体験記『クンダリニー』を著したインド人・ゴーピ・クリシュナがスリナガルに設立した「クンダリニー研究財団」もその一つである。その後、この機関は欧米にも作られている。

今回のシンポジウムでは、あくまでも東洋思想の伝統という文脈と、現代における新たな局面という両方の視点から、いくつかの資料を提供して試論を語ってみたい。

クンダリニー覚醒

――ヨーガ修行体験を通して見るクンダリニー――

成瀬雅春（成瀬ヨーガグループ主宰）

●プラーナとクンダリニーとシャクティ

サンスクリット語のプラーナという言葉の複数形は「生命」という意味である。プラーニン（プラーナを有するもの）は生きもののことをいう。ヨーガではプラーナは「宇宙に満ちている根源的エネルギー」だとされている。

また、宇宙のあらゆる存在はプラーナで構成されているともいわれている。換言すれば、プラーナというエネルギーによって、存在が成り立っているということになる。つまり、この宇宙で存在として認められるものは、すべてプラーナで構成されていることになる。当然人間の存在もプラーナで成り立っていることになる。

そして、その根源的エネルギーであるプラーナが、人体内で超常的能力として活性化することを「クンダリニーの覚醒」という。

クンダリニー(kundalini)というのは、コイル、螺旋（らせん）、環、巻き毛などを意味するサンスクリット語のクンダラ(kundala)という名詞から出た「クンダリヌ（kundalin）螺旋を有するもの」の女性形主格である。クンダリニーとクンダリー(kundali)は同じ意味であり、これが日本に入って来て「軍荼利明王（ぐんだりみょうおう）」となった。（注・Kund の n と d の下に・をつける）

クンダリニーは、その「螺旋を有する」という意味から、３回半とぐろを巻いた蛇が眠っている姿がイメージされた。蛇は生命力の象徴として扱われるところから、根源的生命エネルギーという意味合いもある。根源的生命エネルギーをもった蛇が、３回半とぐろを巻いた姿で眠っている状態がクンダリニーということになる。

クンダリニーは、クンダリニーシャクティとかクンダリニーエネルギー、クンダリニーパワーなどの表現が使われるが、少しそれを整理してみよう。

クンダリニーシャクティはサンスクリット語で、シャクティ(sakti)は、動詞語根(sak)の「～する力をもつ」「～することができる」という言葉から派生している。（注・sak の s の上に ´ をつける）

クンダリニーパワーやクンダリニーエネルギーというのは、「パワー」「エネルギー」が英語で、サンスクリット語と英語を使ったクンダリニーシャクティの別の表現語である。クンダリニーシャクティの英語訳には「サーペントパワー」という言葉がある。日本語に置き換えれば「蛇の力」となる。

まとめてみると、プラーナは「宇宙に満ちている根源的エネルギー」であり、クンダリニーは、そのプラーナが人体内に「根源的生命エネルギー」として、三回半とぐろを巻いた蛇の姿をとって眠っている状態である。そして、その蛇の中に潜んでいる「宇宙根源力」をシャクティという。また、その宇宙根源力を象徴した神様が、シヴァ神のお妃の「シャクティ女神」である。

したがって、「プラーナ」「クンダリニー」「シャクティ」という三つの言葉は、時として同じ意味合いで使われるが、間違いではない。

●環境による変化

動物は環境に順応して進化（＝変化）してきた。人間も例外ではない。太古の時代には、クンダリニーは通常の能力として使われていたのだろう。それが、文明が発達し、科学が進歩するに従って、不必要な能力となったために、使えなくなった。

仏陀もキリストも、民衆を帰依させる必要があった。そのために超常的能力を使い、民衆の心を惹き付けた。しかし、現代では、空中からパンを出したり、空中浮揚をしたりすることは、マジシャンのも

のとなり、民衆を帰依させるために使われなくなった。八大通力と呼ばれる超常的能力も、インターネットや携帯の時代には、ほとんど必要なくなった。これらは、すべて環境の変化によるものだろう。

●クンダリニー覚醒テクニック

クンダリニー覚醒のテクニックは、ヨーガ経典に記述してある（別紙参照）。私自身は 1982 年ごろから、ヨーガ経典の記述に記載されているクンダリニー覚醒テクニックを実践してきた。それはムーラバンダ（肛門の引き締め）というテクニックで、おそらく 100 万回を超えたあたりから、クンダリニー覚醒技法として、使えるようになったと記憶している。そして、クンダリニーエネルギーの上昇を、経典の記述通りに実践すると、背中側にその上昇を確認できることが判った。

この間、私は安全にクンダリニー覚醒を果たしたが、クンダリニー覚醒は危険だという側面もある。インドで石畳の地面に尻を打ち付けて覚醒させようとしていたヨーガ道場を、目撃したことがあるが危険極まりない。クンダリニーは交通事故でも、出産のショックでも覚醒することがある。それはアクシデントではあるが、ヨーガによって対応していくことが可能である。

ヨーガ経典の記述にある覚醒技法が安全なのを、私自身の体験から確信できた。そこで 1983 年から公開し、これまでに多く（数 100～1000 名単位）の人たちの前で実践してきた。また、安全にクンダリニー覚醒を果たすためのマニュアルを考案し、レベル 1 から 42 までのテクニックを現在指導している。

これまでのそういった経験から、私は「クンダリニー・シャクティ」は間違いなく人間に内在していると断言できる。また、クンダリニー上昇とクンダリニー覚醒は、私の体験から、間違いなく有ると認識している。

●私のヨーガ修行

ヨーガは必ずグル（導師）から教わらなければならないとされているが、それは一般論である。誰かに教わらなくても、――というか教わらない方が正しいヨーガを身につけることができる人もいる。そうでなければ、最初のグル（導師）は生まれなかったことになる。私自身は、まったく誰かに教わることなく、自分自身の内部からすべての答えを引き出してきて、ヨーガを身に付けた。

たとえば心臓の鼓動を止める呼吸法は独学で体得した。そのテクニックは呼吸法の技術を高めれば誰にでも身につけられると思える。空中浮揚（アーカーシャ・ガマナ）と空中歩行（ルンゴム）はヨーガ経典から見出した。空中浮揚も空中歩行も、その必然性があればいまでも出来ると思う。ただし、飛行機も新幹線もある現代では、その必然性を見出すことは困難であろう。

そういったテクニックを私が独学で身につけた理由は、インドでも日本でも、そのテクニックを教えてくれる人に出会えなかったからである。

インドで高名なグルとされている人にも出会っているが、私が出会った人たちのなかでは、アチュターナンダという名前のインド人唯一人が、真のムクティ（解脱）に至ることができるであろう修行者であると思えた。たった一人でもそういう人がいたことで、私は自分のヨーガ修行に光明を見いだすことができた。

インドのクンダリニー・ヨーガ道場も何カ所か知っているが、残念ながら、一か所もクンダリニーらしき修行は行っていなかった。それは現在の日本でも同じであると思えるし、世界的にもそうなのだろうが、悲しいことだ。

私（＝ヨーガ）の目指すところは、マハー・サマーディ（大いなる悟り）であり、その先のムクティ（解脱）をゴールと考えている。ヨーガは自分自身をコントロールするテクニックであり、その中で最高のコントロールが「死期を自在にコントロールする」ことだ。それがマハー・サマーディであり、古今の聖者たちはそれを果たしてきた。その結果、二度と人間として生まれてくることのない状態＝ムクティに至ることができるのだ。

私は現在、そして今後もムクティに向けてヨーガ修行をこつこつと続けるつもりである。

個人研究発表（27 日）

「仏教の社会貢献と ex-spiritualism － 龍爪信仰復興を目指す事例から」

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程　戸田弘子

要旨；

大会会場は龍爪信仰で知られる地域に位置する。

本発表では、龍爪山麓の曹洞宗古寺三枝庵における 2006 年の調査に基づき、＜古い様式＞の復興を以て地域貢献を目指す寺院の事例を紹介する。現代社会に浮薄に迎合するのではなく、本来の土着神仏習合形態の再認を期す住持の生活史は、トランスパーソナル心理学/精神医学研究の重要資料と考える。

近代日本で産まれた精神/心理療法に挙げられるのは、森田療法と内観療法[近年には臨床動作法]である。二者に通じるのは、セルフコントロールによる自己治癒力促進を目指すことである。即ち、心を外界から閉ざし、心の働き殊に外的事象の捉え方を変容させ、心身の平安へと繋げる。唯識が所謂「心理主義」と一脈通じることからも、これらの思弁的局面に仏教的要素を見ることが可能だ。この「仏教的精神/心理療法は個の精神修養を旨とする」との近代的理解に対し、日本仏教(北伝)修行者は声聞・縁学(上座部)に留まらない境地を目指す、との異議が申し立てられてもよい。例えば、欧米に知られる悟りの階梯の表象「十牛図」の極みは、「入鄽垂手」と解す。利他の行為(菩薩行)「灰頭土面」、即ち大悟を得た者は再び巷に交わり衆生の救済を自ずと果たす姿が示される。周知の如く禅は大乗の教えである。

いまや、既存宗派の仏教者は、社会の不安と病理に対しその地位に相応しい貢献を如何に成し得るかに存在意義が問われる。殊にオウム教団事件以降、「宗教」全般への忌避感が社会に根を拡げた。『社会貢献する宗教』(稲場圭信/櫻井義秀編著,2009)と題した著が刊行されるように、もはや、宗教が社会貢献を果たし得ること自体、我々の暗黙の共通感覚に馴染み難くなった。それら宗教社会学では、既存仏教セクト寺院の活動が、「葬式仏教」からの脱却を企て、寺院をコミュニティ活動・ポップコンサート・前衛芸術展示に場を提供する等、＜新しい様式＞を模索することとして取りあげられるのが趨勢である。

近代以前、自然霊・祖先霊崇拝に即した医の経験知を含む巫的行為が、身心治療として受容されていた。この＜古い様式＞は、修行者の利他行為であり、禅をはじめ諸々の精神修養と並ぶ施療と見做し得る。それらは概ね「加持祈祷」と呼ばれる。

「加持」は、験力を得た修行者と神仏との篤い互恵関係であり、「加持」に支えられ修される「祈祷」技法は、憑霊信仰に依拠する。即ち多くの場合、施術者は加持に依る神仏と入我我入し、来談者・患者に憑く様々な霊的存在と対峙対決する。この面接技法は、瞑想を用いるセルフコントロール[person centered]に比し、施術者優位[therapist centered]と見える。

今日「祈祷」は知識層好みの洗練された精神/心理療法と見做されないが、深く懊悩する人々にはその類の格付けは問題にはならない。そのとき「呪術」は、森羅万象に連なる祖霊への崇敬[panpsychism]に基づく救済活動(社会貢献)となる。

不妊女性の「喪失」という経験世界を知る
――V.E.Frankl の「意味」という視点から

竹重　幸（名古屋大学大学院）

生殖医療は、日々めざましい進歩によって妊娠・出産の可能性を高めている。しかし、一方で、多様な選択肢による迷いや悩みは尽きない。金銭的・身体的負担、そして心の傷や疲労などの精神的負担は治療の継続を妨げる。さらに、ゴールが見えない治療であることがますます治療を先延ばしにし、妊娠のチャンスを逃してしまう原因となっている。

そもそも「人間の命は授かりもの」であるという医学的な原点から、どんなに先端技術を駆使しても、命は操れるものではない。治療背景には、「結婚したら子どもができるもの」と考える人たちに理解してもらえないため、時に不妊女性への圧力となり、孤独に陥りやすい。さらに生殖能力は、身体能力の基本であることから、うまく機能していないことによって自分自身について疑問を抱くようになる。女性は「産む性」であることが明白である以上、「産めない」という事実は自分の身体に裏切られたような思いを募らせる。このように不妊は不名誉な烙印として捉えられるため、「結婚＝妊娠」というライフステージにある女性にとっては、ネガティブな経験として意味づけられたままその後の人生に影響する。

本研究では、治療後の当事者の心理的過程や生きかたを取り上げ、人生における「子どもの不在」の意味づけを考えてみたいと考えた。不妊治療を受けたにも関わらず、子どもを授からなかったある中年期女性の語りを聴き、自閉的になっていく傾向が顕著であることから、治療断念後の人生設計を構築するうえでの何らかの介入が必要だと感じられた。終生消滅しえない「喪失体験」や、思い描いていた「子どもを産み母親となる」人生物語をどのように新しい人生の物語に転換し、リ・スタートできるまで見届けたいと思った。面接時の語りの経過としては、①不本意・身体へのビリーフ喪失➠②社会的圧力と孤独感➠③焦燥感と不安➠④治療の意味づけ➠⑤諦念➠⑥受容という心理的変化が見られた。そのなかで、人生の再構成のためには、不妊経験の意味づけがその土台となることを確信した。患者を「降りる」選択には、すでにその後の人生の意味を「子どもを産み育てる」以外の価値への転換が必要である。「苦悩」に耐える過程を経て、「諦め」の感情へ移行することによって、人間は運命を変えることはできなくても、自分自身を変えることはできるようになる。Frankl は、これを「態度価値」と表現し、この態度価値が存在することが人生において意味を持つことを決してやめない理由であると説く。つまり、自分の置かれた運命や変更できない状況にどのような態度をとることができるのかということが、人生のほうから問いかけられ、試されているのである。どんな状況でいかなる人生でも、そこに必ず「意味」が存在し、「今・ここに」発見されることを待っている。故に不妊に苦しむ人にとって、「意味」を見出すことは、その後の人生の道案内として必要なのである。

本発表では、許せられるのであれば、少し分野を越えて「不妊治療とは何か」ということから伝えたいと考えている。「言えない・見えない」当事者たちの思いや、不妊治療は社会性の強い特殊な医療モデルであることが伝えることができれば幸いだと考えている。

ケン・ウィルバーと西田幾多郎におけるヘーゲル哲学と大乗仏教の受容について

沖縄工業高等専門学校　青木久美

ケン・ウィルバーと西田幾多郎は、ともにヘーゲル哲学と大乗仏教の影響を色濃く受けているが、ウィルバーの基本的姿勢が東西思想の融合にあるのに対し、西田は大乗仏教を基礎に、ヘーゲル哲学を超えた独自の論理を打ち立てようとした。そのため、ウィルバーと西田における世界と個人との関係に関する考え方はかなり異なったものとなっている。

まず、ヘーゲル哲学の受容からみてみよう。ヘーゲル弁証法においては、個物は絶対者の自己展開における過程的存在にすぎないが、ウィルバーの進化論もこの考え方を継承している。ウィルバーにとって進化とは「スピリット」が真の自己に目覚める過程である。逆にいえば、「スピリット」は、進化の最高の段階においてはじめて真の自己を自覚するのであって、その進化途上にある個人が真の自己に目覚めることはない。

いっぽう西田においては、個物は「絶対無」の否定的自己限定として存在する。ゆえに各々の個物は自由意志を持つ独立的存在であり、世界の表現点としての意義を持つ。また西田の歴史的世界は、現在から現在へと自己を形成してゆく創造的世界であり、各々の瞬間は「永遠の今」の自己限定であると同時に、無限の過去と未来を含んでいる。ゆえに、真の自己への目覚めは、この瞬間において可能なのである。

進化途上における個人の目覚めの問題を解決するために、ウィルバーは「悟り」を、「ある任意の時点において存在する、それまでに進化したすべてのステートとステージとの一体化」（*Integral Spirituality,* p. 241）と定義する。2000 年前のゴータマ・ブッダの「悟り」は、現在の「悟り」と同じく「完全な自由」を提供するものであるが、過去の「悟り」はその充溢性の面において現在の「悟り」に劣るというのが彼の意見である。だが、「悟り」は「深化」するものであったとしても「進化」するものではないはずである。過去におけるブッダの「悟り」が、進化途上にある仮の自己への目覚めであったとするならば、それは「スピリット」の真の目覚めに貢献するものであったとしても、ブッダ自身にとっては「悟り」とさえ呼べないであろう。

大乗仏教の受容に関しては、ウィルバーと西田とでは「空」の理解がそもそも異なっている。ウィルバーによる「悟り」の定義の根底にあるのは、真の自己への目覚めとは「すべて」との一体化であるという考え方である。つまりウィルバーにとって「色」と「空」とは一体であるべきものであるが、このような「空」は不二一元論の流れを汲むものであり、『中論』でいわれるような不一不異なる「縁起」としての「空」とは異なる。それに対し西田における「絶対無」（一）と「相対有」（多）の関係は、まさに不一不異なるものである。ただし西田は大乗仏教をもまた、単に「受容」したのではない。『中論』における不一不異なる「縁起」としての「空」は、ブッダの沈黙の言語的表現である。ブッダは自らが悟った真理を言語で説くことの不適切性を認識し、沈黙をまもったのであるが、『中論』においてナーガールジュナはそれを「八不の縁起」として表現し、「縁起」における諸々の事物（「法」）が、同一でもなければ異なるものでもないことを説いたのである。その背景には説一切有部における「法」の実体化があり、『中論』の主たる意図は、彼らの教説を批判し、戯論を滅することにあった。いっぽう、西田にとって「絶対無」と「相対有」とが不一不異であるのは、「絶対無」が絶対矛盾的自己同一的に自己否定を含んでいるからである。ゆえに、「絶対無」は自己において絶対の他者を見る。このような「絶対無」の自覚は、そのノエシス的側面において、宗教体験の意義を有する。絶対者の慈悲によって我々の自己は絶対の無を自覚するのである。またノエマ的側面においては、世界の自己限定的自己形成の運動を基礎づけるものなのである。

大学生の首尾一貫感覚（SOC）と死生観の関連性について

○遠藤伸太郎[1)]・大石和男[2)]
[1)]立教大学大学院、[2)]立教大学コミュニティ福祉学部

［はじめに］

Antonovsly (1979) によって体系化された健康生成論の中核をなす概念である首尾一貫感覚（Sense of Coherence: SOC）は、汎抵抗資源（General Resistance Resources: GRRs）の存在状況によって大きく影響を受けることが知られている。特に、動員されうる GRRs の豊富さはストレス対処という観点から重視される。しかしながら、スピリチュアルな価値観の一つである死生観は GRRs となりうることが推測できるが、SOC との関連性については明らかにされていない。

［目的］

本研究では、大学生を対象として SOC と死生観の関連性を明らかにすることを目的とした。

［方法］

調査対象者：首都圏の大学生 732 名（男性 315 名、女性 417 名）、平均年齢および標準偏差は 19.4±1.4 歳であった。

測定項目：①SOC-13、②死生観に関する質問紙（大石ら（2007）により作成された「死後の生」などの 5 つの仮説による質問紙）

［結果］

結果の処理：死生観に関する質問紙の回答をもとに、調査対象者を「信じる群」、「信じない群」、そして「どちらでもない群」の 3 群に分類し、SOC 得点および下位概念である「有意味感」、「把握可能瀬感」、「処理可能感」得点をそれぞれ比較した。

統計処理の結果、5 つの仮説すべてにおいて、「信じる群」の方が「信じない群」および「どちらでもない群」に比べ有意味感得点が有意に高い値を示した。

［考察］

本研究では、特に SOC の下位概念である有意味感が死生観に関連している可能性が示唆された。有意味感を高めるためには、人生における結果の形成への参加が重要な影響を与えることが知られている。そこで、人生において起こる出来事に意味を見出して、自ら参加し結果を出すことができれば、5 つの仮説を信じることにつながる可能性がある。本研究で提示した死生観を信じる傾向がある者は、人生における生きがい感が高い傾向にあることが報告されている（大石ら，2007）。したがって、スピリチュアルな教育によるだけでなく、何かに挑戦してその結果に積極的に関わるようなポジティブな人生経験をすることで、スピリチュアルな価値観を高めることができるかもしれない。今後は、スピリチュアルな価値観を高めるために SOC がどのように関わっているのかについて、より詳細に研究したいと考えている。

参考文献

Antonovsky, A.: Health, Stress, and Coping: New Perspective on Mental and Physical Well-being. Jossey-Bass Publishers: San Francisco. 1979.

大石和男・安川通雄・濁川孝志・飯田史彦: 大学生における生きがい感と死生観の関係―PIL テストと死生観の関連性―. 健康心理学研究, 20 (2): 1-9, 2007.

題　目：

日本語版自己報告式スピリチュアル・インテリジェンス尺度（SISRI-J）作成の試み

発表者：

村上祐介（関西大学大学院心理学研究科）

【問題と目的】海外では，ここ 10 年ほどの間に，「スピリチュアルな知能（spiritual intelligence）」に関する議論が行われている（Fontana, 2003; Hyde, 2004; Zohar & Marshall, 2000）。King & DeCicco（2009）はこれらの動向を踏まえ，スピリチュアルな知能には，「批判的実存思考（Critical Existential Thinking: CET）」，「個人の意味生成（Personal Meaning Production: PMP）」，「超越性の気づき（Transcendental Awareness: TA）」，「意識状態の拡張（Conscious State Expansion: CSE）」という 4 つの中核的な要素が含まれていることを明らかにし，これに基づく独自の尺度を開発している。

しかしながらわが国では，スピリチュアルな知能に関する議論は皆無に等しく，この概念を量的に研究する心理尺度もいまだ開発されていないのが現状である。そこで本研究では，King & DeCicco (2009)によって開発された The Spiritual Intelligence Self-Report Inventory（SISRI-24）の日本語版の作成を試み，予備的な検討を行うことを目的とする。

【方法】質問紙調査は，2010 年 6 月 29 日と同年 9 月 29 日に，A 大学において，講義の一環として実施された。実施前に，研究の目的，調査が自由参加であること，プライバシー保護等の倫理面についての説明を行い，同意が得られた学生 363 名に質問紙を配布した。欠損値が含まれていた質問紙や，25 歳以上の協力者 90 名を分析から除外した。協力者は 273 名（男性 113 名，女性 160 名）で，平均年齢は 19.04 歳（SD=1.14）であった。

質問紙は，（1）フェイス・シート，（2）日本版「人生の意味」尺度（日本版 MLQ；10 項目，7 件法；島井・大竹，2005），（3）SISRI-J（24 項目，5 件法），（4）神秘主義尺度（32 項目，5 件法；西脇，2004），（5）バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版（BIDR-J；24 項目，5 件法；谷，2008）から構成された。

【結果】SPSS の PASW Statistics 18 を用いて，最尤法による因子分析を行った。軸の回転にはプロマックス回転を用いた。SISRI-J について，原版とほぼ一致する 4 因子が得られた。信頼性係数はそれぞれ，α=.773（CET），α=.714（PMP），α=.829（TA），α=.884（CSE）であった。項目例を Table1 に示す。併存的妥当性の検討を行うために，その他の下位尺度との相関係数を算出したところ，PMP が日本版 MLQ の意義保有と中程度の正の相関があった点は先行研究の結果を支持するものであったが，意義探索との間に，先行研究では見られなかった弱い正の相関が見られた。また，CET が意義探索と弱い正の相関をもち，SISRI 総得点（SI）と神秘主義総得点の間に中程度の正の相関が見られた点は，先行研究の結果を支持するものであった。結果を Table 2 に示す。

【考察】今後の課題として，再テスト法などによる信頼性の検討や，更なる外部基準を用いた基準関連妥当性の検討を行い，SISRI-J を一層精緻化することが挙げられる。また，年齢や宗教形態が異なる対象者に調査を実施し，わが国におけるスピリチュアルな知能の構造をより詳細に明らかにしていく必要がある。

Table 1 SISRI-J に含まれる項目例

Ⅰ. 意識状態の拡張(α=.884)	
8	高次の精神状態または意識状態に入るタイミングを，コントロールすることができる。
12	様々な精神状態や意識状態のレベルを，自由に行き来することができる。
Ⅱ. 超越性への気づき(α=.829)	
21	何らかの偉大な力（例えば神，神のようなもの，神聖な存在，より高次のエネルギーなど）があるかどうかについて，深く考えたことがある。
18	人生のもつ物質的でない側面について，かなり気付いている。
Ⅲ. 批判的実存思考(α=.773)	
3	これまでに，自分が存在する目的や理由について，じっくり考えてきた。
9	人生，死，現実，また存在のようなことについて，自分なりに考えてきた。
Ⅳ. 個人の意味生成(α=.714)	
19	人生の目的に応じて，意思決定をすることができる。
23	日々の経験の意味や目的を見い出すことができる。

注：King博士の許可をとって翻訳

Table 2 SISRI-J と各尺度の相関係数

	SI	CET	PMP	TA	CSE
MLQ:意義探索	.324***	.397***	.317***	.212***	.156*
MLQ:意義保有	.331***	.130*	.403***	.239***	.341***
神秘主義総得点	.532***	.330***	.369***	.476***	.507***
BIDR:自己欺瞞	.173**	-.057	.320***	.093	.263***
BIDR:印象操作	-.060	-.111†	-.011	-.054	-.005

†.05 < p < .10; ***p < .05; **p < .01; ***p < .001

題目（副題）『明晰夢体験　～その内容分類と「第四の意識状態」の可能性～』

明治大学大学院　情報コミュニケーション科
情報コミュニケーション学専攻　博士後期課程一年　石田沙織

要旨：
明晰夢とは広義には「今自分が夢を見ていると自覚できる夢」のことを指すが、その科学的実証以降は発生のメカニズム、個体差の研究、臨床的な応用など、主に生理学や心理学の分野での研究が中心となり、体験者に対しての体験内容の聞き取り調査がほとんど行われてこなかった経緯がある。
その理由として明晰夢体験が一種のエンターテイメントとして、「夢の内容を自由に操れる」という能動性に注目されてきたことが挙げられるが、その反面で、体験者の受動性、それによって得られる体験内容の特性について語られることは少なかった。おそらくその体験が西洋の文脈で言えば「恍惚」、東洋の文脈で言えば「涅槃」に近い、一種の宗教的な色合いを帯びる可能性のあるものであり、踏み込むのにためらわれたということも考えられるだろう。このような境地にいたるための修行方法として東洋では禅や瞑想が発達してきたのであり、明晰夢という「睡眠時の出来事」が介入する余地がなかったためともいえる。
本発表では、この明晰夢体験の能動 - 受動性に着目し①明晰夢体験を内容に則した形で分類し、②明晰夢体験をはじめとする、金縛り体験や瞑想体験等、変性意識状態として総称されるこれらの意識状態を、覚醒、夢見、睡眠に続く「第四の意識状態」として仮に据え、改めて捉え直してみたい。現在変性意識状態に分類される諸体験・現象を、既存の三つの意識状態のいずれかに明確に分類することが難しい所以は、一つに「一人称的視点 - 三人称的視点」等の問題にあるだろう。
明晰夢研究の全般に関して、生理学や心理学などの分野からの解明と研究の発展は、人の意識構造の解明においても非常に重要になるだろうと予測され、また期待されるものでもある。だが、まず何よりも体験者自身の「語り」に現れる明晰夢体験を重視していくことで、生々しさを保持した状態の（その人にとっての）「意識」のあり方、そして外界との関係に触れ、個々人にとって外界との関係がどのように構築されうるかをつぶさに捉えられるのではないかと考える。
明晰夢という現象・体験は、一般的な感覚として「自在に夢を操れる」というエンターテイメント性を重視される傾向にあるが、本来はそれだけに留まらないものである。人の意識構造、ひいては自我や自己というものを考察していく上での一つの視点としての明晰夢現象の可能性について提示したいと考えている。

個人研究発表（28 日）

トランスパーソナルな世界との接触がもたらす生と死の受容
――宮迫千鶴のスピリチュアリティをめぐる旅から―

明治大学大学院　情報コミュニケーション研究科　博士後期課程　岩崎美香

現代に生きる人間が個を超えたものに思いを馳せるきっかけとなるのは、しばしば自分自身の死や親しい人の死に直面した時である。

日本では、戦後の高度成長期以降、生＝有、死＝無というような、いわゆる「唯物的」な死生観が長らく支配的であり、このような死生観の下で老いや死をどのように受容していくかについて課題を抱えてきた〔広井　2003〕。

一方、近年における国際的な宗教意識の調査によると、日本人の 40 代以下の世代においては、宗教を信仰する人が減少している一方で、輪廻転生や死後の世界を信じる人の割合が大幅に増大している〔NHK 放送文化研究所　2009〕。唯物的な死生観とは異なり、死後の世界を想定するような「ポスト・モダン的」とも呼べるような死生観が 40 代以下の若い世代に登場している。

こうしたポスト・モダン的な死生観の形成は、共同体の基盤が弱体化し、社会のあらゆる面で個人化が進む中で、「生きる源泉」としての個人的なスピリチュアリティの形成を説く運動や文化が隆盛してきたことと関わりが深い。新霊性運動（新霊性文化）〔島薗　2007〕と呼ばれるこうした潮流においては、死や死後の世界などの霊的な次元、命の自己完結性の枠を超える生命観など、死生をめぐるスピリチュアリティに大きな関心が寄せられている。

死生をめぐるスピリチュアリティがどのように希求され、ポスト・モダン的な死生観の形成とどのように関連しているのか、その一端を知るために、唯物的死生観とポスト・モダン的死生観の端境期を生きた、画家で評論家の宮迫千鶴（1947～2008）に焦点を当てた。

宮迫は絵画制作や美術評論活動の他、自らの家族体験を通じて、従来の規範に捉われない個人と家族、個人と社会の関係の再構築を目指した家族論やジェンダー論でも知られている。宮迫の関心は早くから、個人（特に女性）が社会的な主体性や地位の確立後に、あらためて振り返られる人間の存立の基盤というべきものに向けられる。そうした関心は、大きな絆を感じていた父親の死を契機に、近代的な合理性に根ざした思考の枠組みを越えて、死の向こう側の世界や霊性の探求にも拡大されていく。

トランスパーソナルな世界と向き合うことを媒介とした、宮迫自身の人生の受容や肉親の死の受容の道筋は、社会的な次元の主体性の獲得や人生の物語の形成とは異なった位相を浮かび上がらせる。すなわち、そこには、社会と個人の関係にもっぱら還元してきた人生の物語のコスミックな次元での自分の側への取り戻しと、死や死後を含めた人生の全体性にわたる新たな物語の獲得が見出される。

1980 年後半始まり 90 年代半ばのオウム事件を経て 2000 年代初頭まで続いた宮迫のスピリチュアリティの旅は、かつて社会的次元の主体性の獲得にコミットした明晰な合理的、懐疑的精神に支えられ、トランスパーソナルな世界と冷静に向き合うものとなっている。それゆえ、2000 年代に広く見出されるようになったポストモダン的な死生観の形成がなぜ必然的だったのかを示す先駆的な事例として、大きな手がかりを与えてくれる。

５歳にして自我体験から化身教義に至った「事例エミリー」の現象学的解明

渡辺恒夫（東邦大学）

＜要旨＞
事例エミリーとは、英国の小説家リチャード・ヒューズ[1]によって８歳の少女に託して語られ、フロム（『自由からの逃走』）やサルトル（『ボードレール論』）によって自我の目覚めの典型例として引用され論評され、現象学者シュピーゲルベルグ[2]によって、自我体験（"I-am-me" experience）研究の出発点におかれた驚くべきエピソードである[3]。作者自身の５歳時の実体験であることが分かっている。この事例の要点を箇条書きすると、
①ある日突然、「自分はたしかに自分だ」と気づく。②「自分はエミリーである」という自明だった事実が驚くべきことに感じられる。③「無限の時空の中の無数の人々の中で、なぜよりによってエミリーが私なのか」という、哲学でいう「意識の超難問」[4]が起こる。④「エミリー」の類例なき唯一性という不条理を、「人間に化身した神だから」という、化身教義を形成することで解決、ということになる。

この事例を、フッサール現象学を基にジオルジ[5]の方法を取り入れ現象学的に分析したところ、「私は私であるという内的体験によって世界が二重化したため、私はエミリーであるという自明性が破れ、なぜ私は他の誰かではないかと言う別タイプの自我体験の問いが生じ、その答えが、エミリーの類例なき特別さに求められた。類例なき特別さと類的存在を二重に生きる化身教義がここに形成され、エミリーは自分が神であることを自覚した。それによって、世界の二重化は解消した。」というように解明された。

本稿では、統合失調症、アスペルガー症候群の体験事例と比較しつつ、自我体験・独我論的体験を現象学的に解明し、発達性エポケー（developmental epochè）という概念を提起する。統合失調性のエポケーに苦しむブランケンブルグ[6]の患者ならずとも、「定型発達」過程の中で私たちは、自然発生的に現象学的エポケーと構造上共通した体験をすることがある。この体験が児童期に多いのは自明性の世界が未完成だからだろう。発達性エポケーの研究は、宗教心理、否、発達心理一般の、現象学的解明の手掛かりとなるかもしれない。

＜文献＞〔1〕リチャード・ヒューズ：ジャマイカの烈風．晶文社、1998.〔2〕Spiegelberg, H.： On the ‘I-am-me’ experience in childhood and adolescence. *Review of existential psychology and psychiatry, 4.* 3-21. 1964.〔3〕渡辺恒夫：自我体験と独我論的体験．北大路書房、2009。〔4〕三浦俊彦：意識の超難問の論理分析．科学哲学, *35-2*, 69-81, 2002. ［5］Giorgi, A.： *Descriptive phenomenological method in psychology: Husserlian approaches.* Nijhoff, 2009. ［6］ブランケンブルク：自明性の喪失．みすず書房、1978.

臨死体験の諸相

塚崎　直樹（つかさき医院）

１，宗教体験としての死

歴史的に見ると、数々の宗教者が、近親者の死に触れることによって、宗教の門をくぐったことを知ることが出来る。つまり死は、宗教への門を開くきっかけでもあったのだ。しかし、現在では、そのような事実を聞くことは少ない。現代人は死を衝撃的な体験として受け止めることが少ない。対処可能な事態として受け止めているのだろう。

２，事例

肉親が死を目前としていることを告げられた事例。精神的ショックを受け、周囲からは不穏興奮状態と見られたが、本人は悟りに近い状態になったと感じていた。２４時間以内に回復し、痕跡を残さなかった。その後本人はその体験をスピリチャル・エマージェンシーであったと振り返っている。

このような興奮状態に陥った原因は、身近な人が死に直面しているという事実に何の準備もなく向き合ったということにある。未来が確定していて、何の施す手もないという事実。いわば死がその姿を目の前にさらしたと言える。その圧倒的な事実の前に、事態を言語化して捉えることも出来ず、心理的距離も取れないために、錯乱状態に陥ってしまったのだ。

３、 死は誰に来るか

死はもっぱら死んでいく人に来るものと思われている。しかし、目の前で臨終を迎える人の存在は、他に比較できないほどの印象を与える。死は、死んでいく人だけに来るのではない。臨死体験もまた、本人だけに訪れるのではなく、その場に同席している人々にもやってくるだろう。死の衝撃力は極めて強い。その衝撃力を低下させるために、人類は色々な方法を取ってきた。その一つは、死はもっぱら死んでしまった人間のものである。我々は生きているということを確認することである。もう一つは宗教儀礼である。

４， 死を見失う現代

世俗化された日常性が生活のすべてを覆い尽くす現代社会では、宗教者の役割は極めて限定されたものである。個の欲望を満足させることを重視する社会では、共同体を維持するための時間やエネルギーは斬り捨てられがちである。一人の人間の「死」は種々の物語の中に埋め込まれ、その衝撃力を薄められてしまう。衝撃的な死は、覆い隠されてしまう。死のプロセスの医学化。死体の不在。死体の映像のない社会が生まれる。

しかし、どのように取り繕おうと、死は必然的にやってきて、周囲の人間を巻き込んでいく。すべてを出来合いの物語によって、つじつまあわせできるわけではない。個人にとって、死を処理する能力は著しく低下している。宗教の力が低下している現在では、死の持っている衝撃力を理解して、適切に対応する力が個々人に求められていることを自覚する必要があるだろう。

妊娠・出産期における
スピリチュアルペアレンティングおよびスピリチュアルケアの重要性
～退行療法のメタ分析を通して～

京都大学大学院　人間・環境学研究科　博士後期課程
風間　明日香

物質主義時代となって久しい昨今、私たちは、飽和状態ともいえる豊かな物質的生活を享受することに成功した。その上、医療技術の進歩も加わり、世界一の長寿国を築きあげている。しかし、その一方で、生活環境の都市化・情報化・核家族化および格差社会への進行などにより、いのちの実感の希薄化が問題視されている。

毎日のように自殺、他殺、虐待などの陰惨な事件がマスメディアを賑わせているなか、人工妊娠中絶件数は、2007 年には約 26 万件に上り、今この瞬間にも、胎児の「意識」を無視した行為が繰り返されている。また、このような親側の問題だけでなく、産科医療や周産期医療をめぐる問題も頻繁に取沙汰されるなど、妊娠や出産を取り巻く問題が表面化し、小さないのちが軽視されていると言わざるを得ない。

本研究では、胎児期から新生児期に刻まれた「記憶」が、どのように私たちの心身に影響を及ぼしているのか、また、胎児や新生児が自分の置かれた状況をどのように把握し、対応しているのかを明らかにする。それをもとに、疾患や問題を有する人々だけでなく、妊娠や出産を迎える人々、さらには産科医療や周産期医療に対しても新たな提言を試みる。

方法として、「胎児期～新生児期退行」に該当する退行療法の臨床事例をメタ分析した。その結果、胎児期から新生児期に刻まれた「記憶」が、無意識にうつ病をはじめとする精神的疾患や心身症などを生起し、その後の人生に影響を及ぼし続けている可能性が明らかとなった。そして、その約 7 割（65.8%）において、母親の妊娠や出産に対する否定的・拒否的な感情や言動がその要因である可能性が明らかとなり、また、医療者側のこころない対応がその要因となり得ることも明らかとなった。

クライアントが語るその「記憶」は、詳細かつ鮮明で、今日の常識では説明しきれない要素が数多く含まれ、胎児や新生児の優れた直観が感じられた。さらに、彼らが子宮内において、既に個性や独自の世界観を有している可能性もうかがえた。

「胎児期～新生児期退行」により、不可視の「意識」に光が当てられ、胎児や新生児がこれまでの常識を遥かに超えた高度な知性を有している可能性が示された。今後、妊娠や出産を迎える人々に対して、胎児や新生児の「意識」をも視野に入れたスピリチュアルペアレンティングの重要性とその推進を、また、医療者に対しても同様に、それらを視野に入れたスピリチュアルケアの重要性とその推進を提言したい。加えて、生まれ来るいのちに対するスピリチュアルケアという新たなパラダイム構築の必要性を提言する。

トランスパーソナル研究所大学院(Institute of Transpersonal Psychology: ITP)における教育：日本発の思想の影響など、いままで語られなかった側面について。

田尻宇成（たじり たかなり）
（projet transpersonal　主宰、
トランスパーソナル心理学研究所博士課程修了）

Institute of Transpersonal Psychology （ITP）に入学する前にうける大学院の説明を受けると、ITP 卒業生が臨床心理士試験に１度で受かる確立が高いというデータを持ち出し、ITP の経験型学問の成果ではないかと示唆される。もちろん、多角的に研究された事実ではないので、正確なことは解らないだろうが、伝統的な心理学トレーンングとは違った教育を受けている者たちが、好成績を残すことは興味深いことである。

今年で３５周年を迎えるトランスパーソナル心理学大学の授業形態、そして、科目は時代にそって、変化してきたが、ある一定の考え方、哲学があるようだ。

現在のトランスパーソナル心理学大学院教育デザインは６つの柱を中心に考えられている。コミュニティー、知性、体、感情（または、心），精神（スピリチュアル）、そして、創造的表現（クリエイティブ・エクスプレッション）である。

ところで、１９７５年にカリキュラムを考えた時に、フレイジャー博士は、肉体的な発達という意味での修練法を、ヨーガなど、いろいろ方法を試したが、結局、合気道に落ち着いた。植芝先生が神秘主義者であることも考慮したという。フレイジャー博士によれば、合気道は、バランスをとりながら、個人の中に中心をつくり、落ち着くということだと考えている。合気道は、生命の力を和にさせることであり、気と融合し、それを深めることにより、敵の意図を反転させ、自分の友とすることができるという。それは、自分を深く見つめることが必要でありそれにより、体、感情、知性における葛藤を無くしていくのだという。この教育が、どんな情況にみまわれても、すぐれた準備をするものだという。もちろん、これは、合気道の創始者の考えであり、それを心理学の現場に応用している例である。

この教育の成果は、一般的に測りがたいが、このホール・パーソン教育というのは、アメリカでは特殊である。それに加え、日本発の考え方がトランスパーソナルに生きているということは、興味深いことである。また、ITP 発の研究法である、オーガニック・インクワイアリーなども、その教育の成果であるといえる。これらのことを、最近の ITP の博士論文やトランスパーソナルジャーナルの記事、個人的体験をふくめて、まとめてみようとおもう。

東洋の身体技法における心身関係の一例：
気功体験の現象学的記述から

関西大学人間健康学部
村川治彦

東洋（ここでは中国、韓国、日本といった東アジア文化圏）と西洋は伝統的に異なる思考方法で人間のあり方を探ってきた。湯浅泰雄（1994 年）は、その思考法の違いを、西洋的思考は「超越的–内在的（経験的）な二つの次元を明確に分離し、完全なるものは天上にあり、地上のすべては不完全であるとした」のに対し、東アジアの思考では「この区別は知的論理によって分けられるものではなくて、主体が修行の過程を通じて自然環境との関わりの中で、内的外的に経験する心理生理的—物理的な様相が次第に変化してゆく関係としてとらえられている」と述べている。身体と心の関係の捉え方についても、こうした思考法の違いが反映されており、西洋では心身は二つの異なる次元に属しその関係のあり方がダイナミックに変化するという視点はほとんど考慮されてこなかった。一方東洋では、ダイナミックに変化する心身のあり方を探求するため、瞑想法を始めとした身体と心に働きかける様々な身体技法が発達してきた。

フロイトに始まる精神分析の流れを汲む心理療法はたんなる心の治療法ではなく、心身関係をダイナミックに変化させうることを西洋文化の中で初めて公に位置づけた知の探求法と見なすことができる。この５０年の間に西洋の心理療法には仏教の瞑想法から太極拳やヨガまで様々な東洋の身体技法が取り入れられているが、これは以上の視点から考えるなら、単なるエキゾチックな治療法としてそうした身体技法が注目されているのではない。東洋の身体技法と西洋の心理療法は、心身のダイナミックな関係を探る実践的な知の技法という点で東西の文化を超えた共通の基盤をもち、その基盤のもとでそれぞれの特徴が交わりながら今新たな心身関係を探る探求法が生まれようとしている。

西洋の心理療法は、百年あまりの歴史しかないために、心身のダイナミックな関係について数千年間知見を集積してきた東洋の身体技法から様々なことを学ぼうとしている。しかし一方で、心理療法は心身二元論の西洋的伝統の中から生まれたが故に、言語や意識による体験の振り返り方について、東洋の身体技法にはない多くの知見を育んできたと思われる。そうした知見は、これまで東洋の身体技法の弱点であっ、関係性の問題や知の共有化という問題を乗り越える為に有効であると考える。

「気功」と総称される心身関係を「気」というメタファーで捉える身体技法について、発表者が西洋の心理療法であるフォーカシングとセンサリーアウエアネスを応用して三人の気功家に行ったインタビューをまとめた博士論文の中から、西洋の伝統的な心身のあり方とは異なる気功的心身のあり方を示す例を紹介する。今回発表するフォーカシングとセンサリーアウエアネスを応用したインタビューによる気功体験の記述は、こうした東洋の身体技法の知の共有化の一つの試みであり、西洋の心理療法と東洋の身体技法による東西の思考法の統合の一つの試みでもある。

２号館和室：体験ワークショップ紹介

２７日：長野式鍼灸

講師　竹内　馬喜男（鍼灸の喜らく院長：054-248-3720・静岡麻機・長野式に造詣が深い）ほか
長野式治療法は、故長野潔先生が東洋医学と西洋医学の融合を試み、体系立てられた効果的でユニークな治療法です。（WKEY 長野式研究会ホームページより）

（1）　東西両医学の融合
長野先生は、人間の身体は東洋も西洋もないと言われ、お若い頃から東洋医学と西洋医学の融合を試みてこられました。『鍼灸臨床わが三十年の軌跡』の始めの、松本岐子さんが書かれた「我が師匠」の中に
◎古典を学んだ人
◎西洋医学の知識があり、東西医学の両側より患者を診断できる人
…古典をもっと理論的に、科学的に理解できないものか…と書いてあるように、まさにそれが体系化されたのが『長野式治療法』です。
長野潔先生の 2 冊の著書には、随所に東西両医学の融合について書かれていますので、是非、ご一読下さい。

（2）　経絡・経穴、あるいは脉診に西洋医学的意義の付加
特徴の（1）にあるように、東西両医学の橋渡しをするために、東洋医学での各経穴や経絡が、西洋医学ではどこにどの様に関係があるのかを臨床で調べ、それらに西洋医学的な意義を与えられました。
例えば、「洪脉」は心臓病やリウマチに、「右関門」はオッディ筋に、あるいは、「脾経」はリンパに関係があるなどです。また、「照海」「兪府」は副腎処置と言われ、副腎の治療が必要ならば、この処置を行えばよいということになります。
このように、経穴や経絡などに西洋医学的な考え方を取り入れたことが、長野式治療法が受け入れ易い理由の一つなのではと思われます。今では、それを松本岐子さんが更に発展させ、古典や西洋医学だけではなく、様々な分野を統合して、新たな理論を展開しています。

（3）　脉診…特に脉状診と長野潔先生独自の脉診
長野式治療法の大きな特徴の一つが‘脉診’です。
先生は、もちろん‘脉差診’もされましたが、「‘脉状診’は、過去の病歴を語り、現在の患者の状態を示し、治療効果を判断し、予後が推定できるものである」、「‘脉状診’が変化しないと、症状が変化しない」と言われ、‘脉状診’の重要さを説かれました。
『鍼灸臨床新治療法の探究』の・自序・に「…脉診に明け脉診に暮れて会得した…」、あるいは、「脉診に全神経を集中させたために、3 年間で 10kg 痩せた」程に修練され、例えば、婦人科では生理や妊娠のみならず、流産や中絶までも脉診で分かるほどの名人芸でした。
また、・あとがき・にあるように、先生は視力障害があり、診断の手段が大幅に制限され、脉診に頼らざるを得ないことが、更に先生の脉診を進化させることになったのではと推察されます。

（4）　バックグラウンド
松本岐子先生（長野先生の愛弟子・米国のハーバード大学付属ベス・イスラエル病院で普及をされるとある）のセミナーで治療を見ていると、「ところで主訴は何だっけ？」と言われることが度々あります。患者さんの訴えている症状よりも、その症状を発現させている本当の原因（バックグラウンド）を治療

することに主眼があります。『医道の日本』社刊のビデオのなかでも、五十肩様の痛みが、甘い物の取りすぎが原因であり、肩周囲の治療よりも、糖代謝異常（これがバックグラウンド）の治療により改善に向かう症例があります。バックグラウンドを治療すると、主訴ばかりでなく、それが原因の様々な随伴症状が改善していきます。長野式治療法を取り入れて治療をされている鍼灸師の方々が、「長野式治療法を学んだお陰で、治る治らないは別として、どんな患者さんがきても驚かなくなった」と異口同音に言われます。これも、主訴に関係なく、まず所見をとり、そのバックグラウンドを推測し、治療すれば、それが肩痛や腰痛、背部痛であっても処置は同じになります。いわゆる本治法になりますが、そのバックグラウンドが、糖代謝異常、下垂など長野式治療法独特の捉え方となっています。

（5） 多様な処置法

長野式治療法では、胃の気処置・下垂処置・副腎処置・オ血処置・消炎処置・血糖調整処置……などと、数十にも余る様々な処置法があります。（7）で説明しているように、バックグラウンドの治療の基になる基本的処置や、甲状腺やリウマチなど様々な特定の疾患に対する処置法などが用意されています。脉診や腹診など、それぞれの所見に対して、あるいは、ある疾患に対しての所見にあう処置法を探し、治療していきます。長野式治療法を取り入れようとされる方は、まず、これらの処置法を一つずつ臨床に使用されて効果を確認されるとよいと思います。

（6） セット鍼

治療の効果をより良いものとするために、長野式治療法で使用される処置法は、いくつかの経穴を組み合わせて治療する‘セット鍼’となっています。例えば、「腹部オ血処置」では、オ血のための「中封」と、扁桃のための「尺沢」をセットにして使用します。オ血が溜まると扁桃の弱体化を招くために、オ血の排泄には扁桃を強化すると、「腹部オ血処置」がより効果を現すことになります。

（7） 「基本的処置法」と「特別疾患に対しての処置法」の組み合わせ

長野式治療法では、本治法たる「基本的処置法」と、標治法たる「特別疾患に対しての処置」を組み合わせて治療することが多くあります。特徴の（4）にあるように、バックグラウンドを「基本的処置法」で治療し、その後、主訴や随伴症状、病名などに対しての「特別疾患に対しての処置」をします。例えば、‘扁桃’、‘オ血’、‘副腎’など、必要に応じて「基本的処置」をして、その後、膀胱炎、胆嚢炎、緑内障などの特別な疾患に対して配穴された処置法を加えて治療をします。もちろん、「基本的処置法」だけで改善していくこともあります。

（8） 臨床に取り入れ易い処置法

処置法の中には、初めての人にも、明日からの臨床にすぐ使えるばかりでなく、学んだ事をすぐに他の人に教えても、教えられた人がまたすぐに実地臨床に使えるという再現性に富んだものが多くあります。これが、長野式治療法が急速に広がった理由の一つと思われます（一部省略）。

しかし、一方、上記のように、長野潔先生の脉診は神業であり、名人とも称されるように奥が非常に深く、鍼の治療技術も職人芸であり、また、「キー子スタイル」と呼ばれる松本岐子先生の治療法も、バックグラウンドを見極める非常に高度な考えが要求され、古典の解釈も次々に進化して、学べば学ぶほど難しく興味の尽きない治療法です。

（9） 処置後の効果の速やかなる確認

長野潔先生にしても、松本岐子先生にしても、一つの処置を行う毎に、その処置法のターゲットとしている所見や愁訴が改善、消失しているか、効果を必ず確認します。それにより、患者さんも治療の効果を実感することができ、患者さん主体の治療となります。

中国：元極気功

講師　米強（常葉学園短期大学非常勤講師、日本大学非常勤講師）
1958 年　中国北京生まれ
1983 年　北京国際関係学院　卒業
1984 年　日本青年会議所訪中時、胡錦涛青年団総書記（当時）の通訳をつとめる
1988 年　中国元極研究会会長　張志祥先生に出会う
1990 年　北京アジア大会時、選手村で連絡官を担当
1991 年　以降、蓮花山の伝授クラスで日本人クラスの同時通訳を担当
1996 年　京都大学総合人間学部　外国人学者として招聘・来日
1996 年　京都大学に在籍中、張志祥先生の来日時の随行通訳
1997 年　北京国際関係学院　助教授
1998 年　北京日本学研究センター　客員研究員
1999 年　「元極神韻」を翻訳（中国中央テレビ製作）
1999 年　「元極学論文選集」共訳（万国学術出版社）
2000 年　「元極健康クラブ」設立

1988 年、今まで秘儀とされていた元極学に出会い、その内容に非常に興味を持ちました。最初は、好奇心から勉強を始めたのですが、学習が進むにつれ少しずつその奥深さに惹かれて、本格的に修行に没頭し始めました。そして修行を始めてから一年足らずのうちに、気がつくと長年悩まされている半月板の損傷が自ずと治っていきました。それまでは、大学病院で診察を受けたり、著名な中医の治療を受診したりしていましたが、殆どその効果はなく、半ば治療を諦めていましたので、この一年ほどで出た成果には、自分自身も非常に驚き、そして意外な収穫でもありました。
そのような経験をした後、さらに修行を励み、「元極は中国で多くの人々を病苦から解放できた以上、日本でも、世界のどの国でも必ず人々に幸せをもたらす」という張志祥先生の教示を胸に、ついに大学の職を辞めて、日本に行く決心をしたのです。

しかし 1999 年の半ば頃から、中国では空前の気功ブームが、様々な理由から、中国国内での活動が大幅に規制されたため、一転して転落の一途をたどりました。その影響はもちろん元極学にも及び、今まで蓮花山では大勢の人々が集まり、大規模な伝授がされてきましたがそれも途絶え、海外から修練者もほとんどなくなってしまいました。そのような中で、私の主宰する元極健康クラブは、沼津の地において地道に活動を続けて参りました。そのような活動が張先生の絶大な信頼を得て、毎年定期的に蓮花山訪問を実施し、延べ 30 回に達しました。あれから十年以上経った今日も、病院での元極気功治療や元極丹薬治療、また修行を兼ねて元極気功三昧の健康ツアーを続けています。中国国内の諸事情で、今までも海外からの訪問客に面会されない張先生ですが、蓮花山に行くたび、個人的に伝授をしてくださったおかげで、私自身は修行を続けることが出来ました。それは伝訣・伝功という元極学独特な伝授方法で、修練のステップアップを図るやり方です。これほどなまでに恵まれた状況で、元極学の修行を実施できたのは、この十年の間に限ってみれば、私だけでしょう。大変誇りに思うと同時に、責任の重大さも感じています。師の替わりに日本で元極を広めて、人々に幸せをもたらすことが私に課せられた使命だと認識しています。

1999 年の来日後は、各地で活動をしながら、現在日本大学(三島校)非常勤講師として日中比較文化論を担当しております。
その他、京都大学をはじめ、奈良大学、コーセー化粧品(中部支社)、乙訓若竹園(身体障害者通所授産施

設)、愛知県化粧品連合会婦人部、関西医科大学、倫理法人会(社)、ライオンズクラブ(社)、静岡大学、健康体操研究会（富士)、YMCA(三島)などで講演･実技指導を行いました。2006.2.23 ﾌｼﾞﾃﾚﾋﾞの「奇跡体験ｱﾝﾋﾞﾘﾊﾞﾎﾞｰ：気功特集」に出演。現在沼津を拠点に静岡、福岡、高浜(愛知県)、福島、大阪、高山など各地で元極学健康法の普及に専念しています。

＊ワークショップについての説明同意事項

どのような技法に関しても言えることですが、本ワークショップ（元極気功）によってカタルシス・浄化反応が起きたり、ご自身の潜在能力（繊細な直感やクンダリニーも含めて）が目覚める可能性があることをご承知の上で、ご自身の判断と責任のもとでお受けください。本学会での責任は負いかねます。虚弱・過敏・特異体質の方、持病をお持ちの方、もともと精神的に不安定な方、服薬中の方、他の治療を受けている方はワークショップを受けるに当たり事前に必ず医師の指示をお受けください。

アクセス、会場案内

JR 東海道新幹線静岡駅下車
または静岡空港（連絡バス又は東海道線で JR 静岡駅まで）も利用できます。

JR の各駅からバス・・・

JR 静岡駅北口（20 番のりば）より約２５分 東部団地線…

『常葉学園短大前(終点)』下車徒歩３分

JR 草薙駅南口よりバスで約１５分 瀬名新田線…（１６０円）

『常葉学園短大入口』　　下車徒歩６分

＊２日目昼食ですが、大学付近にはラーメン店が２店、１００円ローソンが１店、パン屋（HIROO：とてもおいしい）が１件あります。

常葉学園短期大学
常葉学園短大
入口バス停
常葉学園
大学
弁天池
常葉学園
橘中・高
東部団地バス停
常葉学園
短期大前バス停
東部瀬名団地
西奈中
富士屋
長崎屋
サークルK
静清バイパス
1
静清バイパス
1
1
北街道
草薙駅
東名高速道路
東静岡駅
新静岡駅
JR静岡駅
N

常葉学園短期大学　学内マップ

〒420-0911　静岡市葵区瀬名 2-2-1　常葉学園短期大学
代表:054－261－1313